

Title	東京大学国文学研究室蔵「照日の前」翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1992
Jtitle	三田國文 No.16 (1992. 6) ,p.23- 40
JaLC DOI	10.14991/002.19920600-0023
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19920600-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東京大学国文学研究室蔵「照日の前」翻刻

石川 透

例言

一、本翻刻は、東京大学国文学研究室蔵「照日の前」中・下である。

一、本作品は、外題・内題ともなく、題名は、東京大学国文学研究室の目録、並びに「訂室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』）等に依った。また、内容からみて、現存の二冊は、上中下三冊本のうちの中・下巻であると推測し、その巻号を付した。

一、本作品の内容については、拙稿『「照日の前」の諸問題』（『江戸川女子短期大学紀要』第八号・一九九三年三月）等を参照していただきたい。

一、本書の書誌は以下の通り。

〔照日の前〕（中・下）

番号、中世三五・三、三八

形態、袋綴・横型奈良絵本、二冊

時代、「江戸前期」写

寸法、竪一六・六糎、横二五・五糎
表紙、紺色表紙

外題、なし

内題、なし

料紙、斐楮交漉紙

丁数、中・四〇丁、下・三九丁

挿絵、中・七頁（内二頁欠）、下・七頁（内二頁欠）

行数、半葉一二行

字高、一三・〇糎

奥書、なし

印記、「月明荘」（朱）

一、翻刻に際して、次の方針をとった。

1 本文は底本のおもかげを残すように努めたが、漢字・異体字はおおむね現行書体に改めた。

2 私に句点・読点・「」等を記し、改行も加えて読解の便宜をはかった。

3 本文上の意味不明箇所等には（ママ）を記した。

4 底本の丁数は、その頁の末尾に（ ）をもって記した。

5 挿絵は「」で示した。

一、最後に本書の閲覽と翻刻掲載の御許可を賜った東京大学国文学研究室に厚く御礼申し上げたい。

〔照日の前・中〕

正月もすぎ、きさらきはしめのことなるに、ひらのゝさゑもんかねとしは、都の大ばんつとめんため、三十よきにて、上らくせんとしたまふ。すてにはや、御やかたを出給ふ時、姫君のすみ給ふ、にしのたいにうつり給ひて、のたまふやう、「いかにや、ひめきみ、聞給へ。われ、御身をおもひ奉ることは、月日のことくに、あふき奉りけり。しか（1オ）るに、三とせかあひた、たれにあつけをくともなく、とゞめをきまいらせて、都にのほらんことこそ心うけれ。さらば、うしろやすき母も侍るにこそ。さりとて、おほやけの御事を、わたくしにはからふことも、かなひかたければ、まつく都へのほる也。たとひ、ざいきやうのあひだなりとも、都よりこゝまでは、わづか一日二日の道なれば（1ウ）おりくゝのたよりにつけて、たかひに御文をもみゝえまいらすへければ、くるしからず」とて、涙とゝもに出給ふか、立かへり、めのとの女はうに仰けるは、「かまへてくゝ、ひめ君の仰にたがふことなかれ。みつからなければとて、あしくばしあたるな。はゝもたぬひめなれば、よろつおことをこそ、たのみても跡にとゝめてはのほれ」とのたまひて、（2オ）なくく都へのほられけり。

ひめ君の御心の中、をしはかるへし。あまりになげき給ひければ、二三日がほとは、物も参らでうちふさせ給へは、女ぼうたち、あさましく思ひて、とりくゝにすかし奉りけるほとに、すこしは御心もなをりけり。

かくて、日かずをふるほとに、かのそらことつくりし、しのふといふ女ばう、いまはよき折ふしと（2ウ）思ひ、すけ殿のやかたに参りて申けるは、「いつそや申上しやうに、ひめ君の御ちゝは、さんぬる月、御上らくましく候也。ひめ君のすみ給ふにしのたいは、人めまれなる所にて候へは、ひそかに、かの所へ御出候へかし。みつから、まちうけまいらせて、ともかくも、よからんやうにはからひて見申さん」といひければ、すけ殿、おほきによるこはしげ（3オ）にて、すなはち、時こくをさため、しのぶをはかへされけり。

すてに、その夜も、やはんはかりの事なるに、兵衛佐殿は、はい所のやかたをしのひ出、ひめ御ぜんのすみ給ふ、にしのたいに立入せ給ひつつ、かいまみ給へは、ひめきみは、いまたいね給はず、めのとの女ばうと、むかし物かたりしておはします。その御すかた、たうりの、春の風に（3ウ）ほころひ、かいたうの、つゆをふくめるかことし。せんげんたる両びんは、秋のせみの羽にもにたり。えんでんたりしさうがは、遠山とんざんの色にあひおなし。ふようのまなしり、うつくしく、けんろのおとかひ、ほそやかなり。御てのつまさきにいたるまで、玉をのへたるかことくなり。五つかさねのこうちきの下に、ねりのひとへをめしたる御よそはひは、この世の人とも（4オ）見え給はず。すけ殿、ひめ君のえならぬ御すかたに、めもととろき、はしりも

ゆかんと、思はれけれども、心に心をあらそひ、人々のしつまるほどをあひまちて、こしはのかけに、たゝすみ給ふ。(4ウ)

〔挿絵・第一図〕(5才)

やこゑのとりもつけわたりければ、人々、ねやに入れり。れいのしのぶは、いまたねやにいらす。かねてたくみし事なれば、姫君のふし給へる、御まくらもとなるあふらひを、ほそやかにして、こしはのもとに立いでてみければ、すけ殿、こゝに、つゆにしほぬれておはしたり。しのぶ、もし人やきくらんと思ひければ、中く、に物もえ(5ウ)いはす。中將殿のそてを引、つまどのうちへいさなひ入て、そのうち、わか身もねやに入てふしけり。兵衛のすけ殿は、そこもしらぬやかたのうちへしのひ入、たゝすみておはします。「こはいかに成ぬるうき身そや」と、ぜんこもさらにわきまへ給はず、あきれたるふぜいなり。

かのさい五中將のいにしへ、二条のきさきをこひ奉り、(6才)かんなりさはぐ、いたしきの下にしのひみて、月やあらぬ春やむかしとなかめしも、我身のうへにしらゆきの、きゆる心地はし給へとも、しはし心をとりにをし、夏のむしの、火に入て、身をいたつらになすことも、こひちのやみにまよふゆへなり。みつからも、たとへは、いかなるうきめにあふとも、てる日の姫ゆへと思ひなは、(6ウ)うらみとさらに思ふまじとて、心をしつめ、うちの方へ入給へは、あふら火ほのかに見えにけり。ひかりのかけに、あたりをみ給へは、まくらびやうぶをたて、ふし給ふ人あり。これなんひめ君ぞと、かくれなかりけり。おりふし、あたりに、よりふししたる人もなかりければ、うれしさかきりなし。まくらひやうぶのみぎりに立より、(7才)ふし

給へる御すかたを御覧するに、こほれかゝりたるひんのはづれより、にほやかにほのかなるかほはせ、つゆをふくめる花の、あけほのく空、風にしたかへる柳の、ゆふべのけしき、よきにだにも、たへさるかたちは、春の風、一へんの花をふきのこすかとうたかはれ、こうふんをこととせるかんばせは、あきの雲、はんかうの月をはき出す、(7ウ)よそほひゑにかくとも、ふてにもいかてをよふべき。よそなからほのかに見てしかたちの、世にまたたぐひもあらむと、あやしきまでに思ひしは、なをかすならさりけりと、見み給ふに、心もはやほれくとなりて、しらす、わが玉しゐの、そのそての中に入ぬらんと、ある身ともなくおほえ給へは、しとねのうへにより(8才)そひ給ひけるに、ひめきみは、おとろき給ひたるかたちもなく、のとやかにもてなして、やはら、きぬひきかづひてふし給ひたるけはひ、いひしらす、なよやかにみやびやかなり。

すけ殿は、ひめ君のおなしまくらにふし給ひて、ありしなからの心つくし、あはれなるまてにきこえさすれば、ひめ君は、いらへもし給はず。(8ウ)たゝ思ひにしほれたるそのけしき、まことにほひふかうして、花かほに月かすむ夜、たまくらに、見はてぬゆめのおもかけある御心まよひに、あくるもしらす、かたらひ給へとも、なをつれなきけしきにてほとへぬれば、をのかつはさをならへなから、人のわかれをもおもひしりぬ。やこゑのとりもつけわたり、涙のこほりとけ(9才)やらす。きぬくもひやくかになりて、たぐひもつらきありあけの、つれなきかけに立かへらせ給ひけり。

やかたにかへりいらせ給ひても、ひめ君のほのかなりし御お

もかけの、なをこゝもとにある心まよひに、世のうきわさをも
わすれ、くさのをふといふうらのあたりにも、たつねゆきなま
しと、そゞろに思ひしつみ給へとも、ひるは人め(9ウ)もし
げければ、夜ふけ、人しつまる比になりて、かならず、しのひ
てかよひ給ふが、はや、しちのはしがきも、夜までに成ぬれば、
ひめ君、おさな心にも、あはれなるかたに御心ひかれて、のほ
れはくだるいなぶねの、いなにはあらずと、思へるけしきにお
はしけるか、あまりつれなかりし心のほと、我ながら、うき物
におほし返して、(10オ)むすびをかれし心のしたひぼうちとけ
て、さよのまくらをかはしまの、水の心もあさからぬ、御ちき
りなり。

すけとの、御心の中、このいく日かすをかさねて、たまにあ
ふ夜のうれしき、うどんけの春まちえたる心地して、さんごの
きのうへに、やうたいのゆめ、とこしなへにさめ、れんりの枝
のほとりに、りさんの花、こま(10ウ)やかなり。いきては、
かいらうのちきりふかく、しゝては、おなしこけの下にもと、
おほしめしかよはしけるけしき、さすか、かくれなかりしかは、
めのとの女ばう、見まいらせ、「こはあさましき御ことかな。ちゝ
ごのきこしめされなは、いかなる御はからひかあらん。は、御
せんおはしまさねは、ひとへにみつからか、いさめをこそ、も
ちる給ふへき所に、(11オ)おひたるもの、申ことをは、一つも
御せういんましまさで、御心のまゝにふるまひ給ふこそ、うた
てけれ。かの源氏、女三のみやの、かほる大しやう、もうけ給
ひしにはようかはりて、ちゝごにまで、はぢをあたへ給はんこ
そあさましけれ」と、おどしすかしいさめけれとも、あやなく

まよふ御心のみち、のちのわさはひをも、かへりみ給はず、め
の(11ウ)とかいさめも、御みゝにいらすして、しのひくゝに
かよはれ給ふ事、十月にもなりければ、ひめ君の御けしき、たゞ
ならずなり給ふ。

めのと、此よし見まいらせ、「みつからか、申つることよ。ちゝ
さゑもん殿の御上らくのとき、かへすく申をかせ給ふことの
侍るものを、ひめ君の御大事あらむには、みつからこそ、御か
んだうをかうふらめ。なさけな(12オ)の御しわざや」と、な
げきかなしみけるほとに、ひめ君は、つゐに月比みちければ、
たいらかに御さんのひもをとき給ふ。とりあけ見給へは、玉を
のへたる御わかきみにて、おはしましけり。ひめ君、御心には
うれしくおほしけれとも、さすか、しのひてまうけ給ふ御子な
れば、めのとかみる所をはぢて、さらぬていにもてなし給へり。

(12ウ)

〔挿絵・第二回・欠〕(13オ)

めのとの女はうは、かやうのこを見るにつけても、むねの
やすまることもなし。さゑもん殿の御ざい京も、やうく三と
せにみちければ、いまはゝや、御くたりもちかつき侍りければ、
ひめ君の御ことを、「いかに」と御とひあらは、みつから、その
時、こたへ侍らんこと葉なし。とかくうき世にすめはこそ、な
げきもかなしみもあれ。とてもすみ(13ウ)はつましき世なれ
は、いまのみきをよきほだいのたねとなして、後生ほだいを
いのらはやと思ひつゝ、とし四十八と申には、みつからかみを
きり、こきすみぞめに身をやつし、とんせいしゆぎやうに出た
りしか、後には、たうごくほつけ寺に、おこなるすましてすみ

待るとそきこえし。

めのとの女はう、かくなりしかは、かの御中だちし(14才)たりし、しのふと申女ばう、きり人にて、おもふまゝにはからひけり。これをみるうちとの女はうたち、くちくゝに申けるやうは、「いたはしや。とうさいもしろしめさぬひめきみを、そゝなはしまいらせ、たゞいまに、うきめにあはせ奉らんことのおさましきよ」と、ことをまつように思ひゐたりけり。

都にまします、ちゝのさゑもんかねとしは、(14ウ)かやうのことをは、いかてかしろしめさるへき。なれば、ざい京のそのほとも、姫君の御ゆくすゑ、とやかくやとあなじめくらせ給ふか、ことしは、はや十六さいになり給ふとおほゆれば、いかならん人にも見せまいらせはやと、色にこそ出さらね、御心の中には、やるかたなくそおほしめしける。

その比、をとほの大納言まさつなと申けいしやう(15才)の御子に、をとほの中將清綱と申人おはしけり。その比、はりまのこくしに、すはり給ふへきよきこえければ、兼俊朝臣、かのやかたに参りて申されけるやうは、播州きぬかさの住人、ひらのゝ左衛もんかねとしと申ものにて候か、こくし、近日御下かうあるへきしうけ給はり、御げさんのそのために、これまで参りて候よし(15ウ)申入させ給ひければ、中將いかゝ思はれけん、もんぐはいままで立出て、かねとしをしやうして、きやくぎになをし、ねんごろにしきだい立給ひければ、さゑもんは、おそれ入給ふ事かきりなし。(16才)

〔挿絵・第三圖〕(16ウ)

中將、大きにかんじ給ひて、さんかいのちんぶつに、こくど

のくはしをとゝのへ、しゆをさまゝにすゝめ給ひけり。そのゝち、こかねつくりの太刀一ふり、とり出し給ひて、かねとしに給はりつゝ、「このたちと申は、みつからがせんそよりつたへたる、てうほうにて候へとも、御へんにこれを奉る。ざいこくのおりふしは、なにごともたのみ(17才)奉るへし」とのたまひければ、さゑもん、おほきによるこひて、三といたゝき給ひけり。「いかさま、御下かうのおりふしは、御ほうこう申奉るへし」、いとま申て「さらは」とて、わか宿所に立かへり給ひぬ。

さるほとに、三とせの大ばんすきければ、さゑもんぜうかねとしは、君の御ゆるしをうけ給て、わがほんごくにかへられけるか、いそぎ、ひめ君(17ウ)のおはします、にしのたいにいらせ給ひて、ひめ君にたいめし給ひけり。おほしめしつるにもまさりて、ひめ君のおひたゝせ、いとうつくしくおはしますをみ給ふにも、母のこのかた、いまだなからへてましますは、いかはかりうれしくおもひ候はんものをと、思ひめくらし給ふにも、いとゝふびんにおはしければ、そゝろに涙を(18才)なかさければ、ひめ君は、また、兵衛のすけに名をたてられし事、わかをまうけし事、ちゝのきこしめすならは、いかはかりうきめをまんすらんと、おそろしくおほしめすにつけても、ほしあへぬ御涙なれば、ちゝは、かくとも、ゆめくゝしろしめさず、あはれなるありさまにて、やかたにかへり給ひけり。

そのゝち、こくし(18ウ)中將きよつな卿、くだらせ給ひければ、十四ぐんの侍たち、一日路まで御むかひに参りて、賀古のこほりに、やかたをつくりてすへ奉り、いつきかしつき奉る。中にも、きぬかさの左ゑもんは、都にて、ふかくけいやくあり

ければ、しよ人にすくれて、御ほうこう、いとねん比なり。

かくて、月日をふるほどに、めんく、申されけるやうは、(19才)「たうごくのこくし中将殿は、いまたみだい所もおはしまさぬゆへに、御心のなくさみたまふよすかもなし。いかならん人にも、おほしめしつかせ給へかし」と、とりくさまく、申合て、むろ、兵庫、こやの、かたより、ゆふにやさしきゆうくんとをも、あまたよひくたし、御しやくをとらせ、いまやうをうたはせなとして、こくしをなぐ(19ウ)さめ奉れとも、これにも御心をなくさめ給へるけしきも見え給はず。た、あけてもくれても、みなみおもてのせんざいにのそんで、風にうそふき、月をもてあそひ、心をすましておはしけり。

ある夜、また、たうごくのゆみやとりに、あさばの庄司まさゆきと申老人、国司御前に参りて、御物かたりして、なくさめ奉(20才)るつるでに、兼俊のむすめ、てる日のひめの事を申ししたりければ、こくし、このよしきこしめし、御いろにふけるけしきにみえ給ひぬ。「さらば、左衛もんか宿所へ、つかひをたてゝめされはや」と申ければ、こくし、なのめならす御よろこひありて、やかて、御せうそこあそはし、すなはち、まさゆきを御つかひにて、左衛もん(20ウ)のしゆく所へつかはし給ふ。

まさゆき、かねとしいたいめんし、こくしよりの仰のおもむきいひふくめ、御せうそことりいたして奉りければ、さゑもん、このよしうけ給はり、「仰のこくし、それかしがむすめは、みめかたち世にすくれ、ゆうにやさしく侍れば、いかなる上らふたちにも、見せ申たく候つれとも、母かわすれかたみともみ申さ

んために、(21才)いま十六になるまでも、かゝへをきてこそ候へ。しかるに、こくしのみだい所と、かしづかせ給はんとの仰せ、身にあまりて、かたしけなく存候へとも、はじめより申やうに、いへをはなれて人にみせんとは思ひもよらす。そのうへ、ひめかことをしたはせ給は、おほそれながら、こなたへ御出候て、たがひの御たいめんあつてのうへに、ひめか心を(21ウ)もとらせ給ひてのうへには、ともかくも仰にしたかひ候へし。かやうに申せば、こくしをかるしめ奉るにたれとも、た、一人のひとりひめか事にて候へは、おほしめしやらせ給ふへし」とそ、のたまひける。

庄司、このよし聞て、こくしの御まへに参りつゝ、いさみに申上ければ、こくし、いとゞあくかれ給ひて、「此うへは、さゑもんか申むねに(22才)まかせて、かれかしゆく所へゆくへし」と、のたまひければ、庄司、「しかるへし」とそ申ける。

こくし、左衛もんのしゆく所へ、御出あるへきよしきこえければ、左衛もん、めんほくに思い、にはのちりとらせ、あひまちけり。すてに中将殿いらせ給ひければ、左ゑもん出あひ、とりくになくさめ奉る。かねてよりやくそく申せし事(22ウ)なれば、かのにしのたいへ、御とも申て入奉り、中将殿、ひめ君のありさまを見給ふに、せんげんたるようしよくの上に、きんすいをかさり、こうふんをことゝし給へは、ようくたるたうくはの、あかつきのつゆをふくみ、せうさつたるやうでうの、春風になひくふぜい、あてやかに、らうたけて、わかむらさきのほひことに、はつもとゆ(23才)ひのすゑ、いかならんとみるに、心もまよひぬへし。よはひ、すてに二八にも見えしか、

かのおさんのしん女、雲となりし夢のおもかけ、玉妃たまき、大真院おほまことをいてし春のこび、かくやと思ひしられたり。(23ウ)

〔挿絵・第四図〕(24ウ)

をよそ美人をかぞふるに、天上にては、たいしやくの御むすめ、しやしぶにん吉祥天女、てんぢくにては、やしゆたら女、せんだら女、大たうにては、殿いんのだつき、しうのほうじ、えつのせいし、かんのりふじん、唐ちやうのやうきひ、わか朝にては、そとをり姫、さいくうの女御、光源氏くわんげんに名を立しは、おほろ月夜のなしいのかみ、さいこ中將ちゆうしやうにこいられしは、二条にじやうのき(24ウ)さき、かしは木のゑもんゑもんにこいられしは、女三にすのみやの御事なり。兵部卿へいぶしやうのかよひ給ひしうきふね、うばそくのみやおさながほ、をのゝこまちがわかざかり、なさけ第一だいいちといはれしは、いつみきしぶ也。いろのふかきは、むらさきしきふ也。千人か中にえられしは、あやめ、ときわ、まこもなり。鳥羽院とりはのうへわらは、けしやうけしやうのまへと申まで、びじんはし(25才)なく、ありけめとも、むかしの世のことなれば、名なのみのこりてかけはなし。

われ都にありし時、てん上のましほりをしつれば、女御、かうい、みやす所、ないし、うへわらにはいたるまで、あまたのみめよき上らふたちを、見奉りしかとも、いまた、てる日のひめほと、ようしよくをのみすとて、ひたすらに、御心をうつされけり。(25ウ)

それよりのちは、をぎのはにつたふ風のたよりにつけ、わすれ草わすれくさのすゑ葉はにむすふ、つゆのかことよせては、いひしらぬ御ふみのかす、はやちつかにも成けれとも、ひめ君は、をもき

かうへのさよ衣、終にはうき名たちぬへしと、いとつれなきけしきなれば、ちゝのさゑもんは、このよしを見きゝて、「やんことなき上らふの、なをざり(26才)ならすの給ふを、などや、いまゝて、御いらへは申さぬぞ」と、いといたくわひたまひければ、ひめ君は、物かなしけにふししつみ給へり。御かほはせ、せきはくとして、涙らんかんたり。名にしほふ、月もうつろふもとあら、こはぎつゆおもげなり。女郎花はらくとこほれかゝりたる、びんのはづれより、ほのかに見えたるまゆの(26ウ)にほひ、わか子ながらも、心まよふほとなれば、わかき上らふの身として、こひ給ふもことほりなりと、いよくあはれにおもひて返り給ひぬ。

そのゝち、こくしよりきこえけるは、
いかにせんはつかに人を水のあはのきえかへるともしらせ
てしかな

とよみてをくり給ひけるを、つかひ、いかゝ思ひけん、ひめ君の御かたへはまいらせすし(27才)て、さゑもんとのにそわたしける。さゑもん、このよし御覽して、松かねと申女はうをめされて、仰けるは、「なんぢ、ひめ君に申へきようは、こくしの仰をそむき奉ては、このくにのすまゐかなふまし。そのうへ、ひめか事は申にをよはず、ちゝも御ふしむかうふるへし。さあらんにおゐては、五きやくの人にあらすや。よからんやうに(27ウ)御返事をつかまつり、こくしの御心をもなくさめて、ちゝかゆくゑも、あんをんならんやうに、はからふへしと申せ」とのたまひければ、松かね、ひめ君の御まへに参り、ちゝ御の仰をくはしく申つゝ、「いとゝだに、女人は五しようのつみふかき

とうけ給はるに、ましていはんや、ちゝこの御ふけうかうふらせ給は、うかみ出給ふ事あるまし。よくく(28才)御しあるあるへく候」と申けれとも、とかくの御返しもまします、引かつきてそふし給ふ。

松かねかへりて、左丞もん殿に、かくと申あけれは、さゑもん、いとうらめしくおほしける所に、にてうと申みやつかへの女はうの候けるか、さし出て申けるようは、「君はいまたしろしめされ候はすや。ひめ君は、ちゝ御の御ざい京の御あとに、上ら(28ウ)ふをとのにもうけ給ひて、うつくしきわかきみまでを、よろこひ給ひつれば、いかにして、また、こと人にまみえんともおほしめすへき」と申けれは、さゑもん殿は、あまりのことのあさましさに、物をもの給はず。「いかゝはせん」とあんし候へとも、たゝひとりあるむすめの、しかも人にすくれてうつくしけれは、あらか風にもあてしと、そたてし子(29才)なれば、つらきにもなんだはかはず。

母かいひごんもわすれがたけれは、こともしさいをよくきゝて、こくしへ申さんとおほしめし、めのどの女はうをめされけるに、「めのとは、御さい京の御跡にて、いつくともなくかげをかくして候」と申す。「されはこそ、いさめをもちるぬゆへに、すさめてこそかくれぬ。中くくのしだいかな」と、くちおしく(29ウ)おもひ給ふ事かきりなし。

よくくきこしめしけれは、なかされ人にあひなれ給ふとなり。わか君は、夕しほとよび給へり。さゑもんのは、このことをき、給ふより、むねひしくとつふれて、おもひわけ給ふこともなかりけれは、引こもりておほしける所に、こくしより

は、たひくくに、さゑもんのもとへ、御つかひをくたされ、「よからん(30才)左右をまちこそすれ」ときこゆれば、左丞もんは、「ひめ一人にもてあつかひて、しかくくのしさい候へは、よきやうに御はからひ候へし」と、御返事申されければ、こくし、此よしきこしめし、「かのあさばは、ふるきものなれば」とて、めし出され、「此事いかゝあらん」と仰あはされければ、政之、申けるは、「ちよつかんの人にて候へは、めしこめ(30ウ)給ひ候とも、わぎはひは候ましか」と申けれは、こくし、「さらば、なんぢをたのむぞ。ともかくも、よきようにはからひて給はれ」と、のたまひけれは、「うけ給はる」と申て、わかやとにかへり、ちやくしの大郎まさみつをはじめて、四人の兄弟に申ふくめ、る人兵衛佐をからめんためにこそ、つかはしけれ。(31才)

「挿絵・第五回」(31ウ)

こゝにまた、左衛もんのおとうとに、みやざき四郎かねみつといふものありけり。ゆみやをとつて、かうのものなるうへ、花鳥風月のみちにもすきけれは、やさおとこなと人もいひけり。都の人は、こと葉のすゑもかうはしきとて、る人兵衛佐とのゝやかたへ、つねに参りて、物かたりともして、なくさめまいらせければ、すけ殿も、あさからぬ(32才)ことにおほしめして、「いなかにも、かゝるやさしき人もあるにや」と、かんし給ひつゝ、ふかくちきり給ふとかや。

しかるに、かねみつ、あさばの庄司か子どもの、すけとのをうかゞひ奉らんと出たつことを、いかゞしてもれきゝきん、いそぎすけとのゝ御まへにまいり、申けるやうは、「すけ殿は、さることありて、こくしのために御てきとなり(32ウ)給ふによ

つて、からめとり奉らんとくはたてにて、あさばの庄司か子どもに仰つけられ、これへ、こんやのうちに、よすへきときこえ候そや。御ようじん候へ」とそ申ける。(33才)

〔挿絵・第六図〕(33ウ)

すけ殿、このよしきこしめし、いまさら出きたることのよう
に、しうしようのけしきなりければ、兼光、あまりのあさまし
さに、「かくては、われらにまてうき目見せ給ふへし。夜にまき
れて、このやかたをしのひいで給ひつゝ、あかしのうらへ、お
もむかせ給へ。それより、はうくへへのびんせん、あまた候へ
は、御船にめされて、きのぢ(34才)へおもむき給ふへし。み
つからも御とも申たく候へとも、それは、御ためのあしく候へ
ければ、えんつきせすは、またこそげざんに入侍るへし」とて、
涙をなかしければ、すけとのも、袖をしほり給ひけり。

いたはしやな、すけ殿は、「ひめきみの御ことをは、さていか
せん。たつきもしらぬ道すからを、たゝ一人、いかにしてかは
のかれはつへき。(34ウ)中く、に、そこもなきたひのそらに
まよはんよりは、こゝにして、とにもかくにも成ぬへし。ひめ
君ゆへと思はは、しぬるいのちもおしからし」と、もたへこか
れ給ひけるを、かねみつ、いさめ申やう、「仰はさることなれと
も、命をまたふもつものは、七世の孫にあふぞかし。うけ給は
れば、すけ殿は、いまた、ちゝもはゝもおはしますとこそ(35
才)きくに、いま一たひちよつかんをゆるされ、都にかへりの
ほり給ひて、ちゝごにもはゝごにも、たいめしたきとは、おほ
しめさぬか。はやく御いそぎ候へとよ。じこくうつりなは、お
うつてもちかつき候はん」と、いさめければ、すけ殿、「この

うへは、ちからおよはず」とて、あやすげがきにてかほかくし、
すみなれさせ給ひたるはいしよを、しのひ出させ(35ウ)給ふ
か、姫君の御ことを、心にかけておほしめしければ、名こりは
さまくつきせねとも、涙とゝもにいそかれける。(36才)

〔挿絵・第七図・欠〕(36ウ)

さてしもあるへき事ならねは、「みぎはのかたはいづくぞ」と、
人にとひく、あゆまれける心のうちこそあはれなれ。夜はま
だよの空なるに、やうくあかしの浦につき給ふ。名にしほ
だふ所とて、月の光はさやけれど、おつる涙にかきくもり、うし
をもなみもさなからに、よるとののみみえしなききのすてをふね、
みづ(37才)からかこづくにこそ、こかれて物やおもふらん。

それよりも、磯つたひして、すまのうらにつき、いたやとと
候ふはまぢより舟にのり、いつみのさかひにあかり給ふ。こゝ
にも、かくれすみ給ふへき、よすかもなかりければ、はしとの
もりをうちすぎ、ふどうざかをへて、高野山にのほり、たうら
いのちぐうともおぼされければ、お山(37ウ)に三日とうりう
し、院々谷々おがみめくらせ給ふとかや。

そもく御山は、さが天わうの御時に、弘法大師の御さう
く、八ようのみねそらにそびえて、上求ぼだいのさうをあら
はし、千仏の座八のたに、そひえたるは、げこうじやうのすか
たかや。むらのとほそ、こけとちて、三糸のあかつきに月を期
(38才)す、かのひぎやうの三こちにおちて、しるしにおひた
る一てうの松、くはいろくのけぶり、ほのかに去て、のきをこ
がせる御いさだう、かうゑんまとを出て、心ほそき鈴のこゑ、
きりにこもりて物すさまし。なん天のてつたうを、まなびうつ

せる大たうは、くもにそびえておひたし。兩かいのまんだら
は、この内にかげられたり。(38ウ)さて、大師御入定ありし、
おくの院へまうて、おかまへ給へは、れいせう風をふくんで、
ゆが上せうのりをあらはし、山花雲をこめて、せきにく中たい
のさうをひす。御仏のけゑんは過ぬれとも、五時の説(せう)いまみ、
にあるかとおぼえ、じそんの出世にはるかなれとも、三ゑのよ
そほひ、すでにまなこにさえきるかご(39オ)とし。かれを見、
これを見給ふにつけても、お山に心はとまれとも、かくても
すみはつましきうき世なれば、なくく下かうし給ひつ、き
のちにかり、千里のはまをうちすきて、くまのしんくうに
おちつき、ゆあさの庄司をたのみて、しはらく年月ををくられ
ける。

さて、ひらの、四郎かねみつ(39ウ)は、しのびて、ひめ
君のおはします、にしのたいに参りて、すけ殿の御ことを、な
くくかたり出しければ、ひめ君はきこしめし、「これはゆめか
やうつ、かや、さていくつをしるへに出給ふそや。みつからと
ても、やすからん、うき身にはあらねとも、しなは一所とこそ
契りしに、うちすて給ふか、なさけなや」とて、りうていこか
れなき給ふ。(40オ)

〔照日の前・下〕

兵衛佐、ゆきかたしらすなり給ふときこえしかは、こくし
しうしやうなのめならず、みうちのの人々も、のちいかならんと、
やすからぬ事に思へり。あるもの申けるは、「兵衛佐、左衛もん

のむすめにちきりて、一人のわかをまうく。その名を夕しほと
申て、ことし三さいにまかりなり候か、かれかおひたちて候
は、のちの御(1オ)わづらひなるへし。いかやうにも、御
はからひあるべう候」と申ければ、こくし、けにもとおほしめ
し、かねとしのもとへ、御つかひをたて、の給ふやう、「る人兵
衛佐の男子、なんぢかむすめのほらにむまれ侍るよし、そのき
こえあり。兵衛佐のありかきこえんまては、こなたへわたし給
ふへき」とのたまひければ、左衛もんは、おもひ(1ウ)よら
さる事なれば、大きにあきれて、かのしのぶをめし出し、事の
しさいをとひ給へは、「しはしはつ、みまいらせけれとも、とて
もかくれなき事なり。いまありのまに申さすは、後のわざは
ひなるへし」と、さもあらげなく、せめ給ふによつて、はしめ
おはりのことをも、のこりなく申出しけり。

さゑもん殿はきこしめし、(2オ)「さらは、そのなんしを、
いかにもして、すかしとりつれてまいられ、もし、さもなき物
ならば、よもあんをんにはあらし」と、ことくしけにのたま
ひしかは、しのふ、此よしうけ給はり、身のけよだちて、おそ
ろしかりければ、姫君の御まへに、まいりて申やうは、「わか君
の御ことを、いかにして、もれきこしめしけん。左衛もん殿、
(2ウ)見給ふへきよし仰候。いまはくるしからぬ御ことなれ
は、御めにかげ申へき」と申けれとも、姫君は、いかにとも返
事し給はず。かゝりし所に、左衛もん殿より、女はうたちをし
て、わか君を御むかへにまいらせらるゝほとに、ちからなくし
てわたし給ふ。ひめ君の御心のやるかたなき、おもひやるへし。
左衛もん殿は、わか君のあり(3オ)さまの、うつくしく、

かゝやかせ給ふにつけても、さきだつ物は涙なり。これほどに玉のようなるおさなき人を、いかにして、人のてにわたすへき。たとへは涙にはもれきこえ、かねとしかいのちをめさるゝとも、ちからなきしだいなり。このわか君におみては、あまりにいとおしければ、とゝめまいらせなんと、ちたびもゝたびおもはれけ(3ウ)るか、中にておもひなをし、「いやゝゝ、ひめかいのちたにあらは、子ともは又もまうけなん。なかされ人の子をかゝへをきては、われ人のためあしかるへし」とおほしめし、しやていの四郎に、かのおさなき子ヲいたかせ、こくしのかたへわたされける。

この四郎かねみつは、もとよりなきけふかきものなれば、このわか君をかたきにわたし、うしなひまいら(4オ)せんことを、いたはしく思ひ、あるものゝ子に、としのほどよりすかたかたちにていたるまで、わか君とすこしもあひたがはさるかありけるを、もとめ出し、こくしの御手へまいらせつゝ、わか君をは、いたはしなから、かたほとりにすてまいらせてかへりける、なさけのほとこそありかたけれ。

かのひめ君の御めとは、一とせあまに(4ウ)なり、世をうき物に思ひて、はりまのほつけ寺のふもとに、かすかなるいほりをしめて、おこなひすましてあたりしか、このほとは、都によろありて、のほりつゝ、かなたこなたおかみめぐりて、くたるとて、道にてこのおさなきを見つけまいらせしか、なにとやらん、心にそみていたはしく思ひければ、いだひてあんじつに(5オ)かへり、よきにはぐゝみ奉るとかや。

いたはしや、あさひのひめ君は、すけ殿にあかぬわかれをし

給ひつゝ、つきせぬ御物思ひなりしかとも、せめては、わすれかたみのわか君を御らんしてこそ、うかりし月日もくらし給ふ所に、あへなく、かたきの手にとらはれ給ひしかは、いまはあだなる露の身の、なにゝかゝりてか、しはしもなからふ(5ウ)へきこゝちもし給はねは、夜ふけ、人しつまりて後、ひそかにあやしきすかたに出たちて、すみなれさせ給ひつる、きぬかさのしゆく所を、なみだとゝもに出給ふそあはれなれ。(6オ)

〔挿絵・第一図〕(6ウ)

かのそらことしたるしのふ、姫君のありさまを、つくゝと見まいらせ、「いまた、にしも東もしろしめさぬ人の、うかれ心のおはしましそめしも、みつからかとかそかし。をちこちの、たつきもしらぬみちしはの、つゆしもときえ給ひなは、草のかけなる御はゝ北のかた、さこそみつからをにくませ給ふらめ」と、いたはしくもおそろしくも思ひければ、(7オ)ひめ君の御せんとをみとゝけ、おなし野の末山のおくにも、まよひはつへぎと思ひつゝ、ひめ君の御あとをふてはしるほとに、のゝむらといふ所にては、ひめ君ををつつきまいらせけり。

ひめ君、このよし御らんして、「みつからこそ、あた人のために、身をいたつらになしはつるとも、おことはなにしにおなしうきめを見給ふへき。(7ウ)はやゝゝかへり給へ」との給へは、しのふは、涙をなかけて申やう、「こはなさけなき御事かな。はしめより、ひめきみの御せんとを、みとゝけ奉らむものは、みつからにかきるへしと、思ひまいらせしうへ、御めのと世をいと給ひしかは、いとゝさへ、いたはしく思ひまいらすれば、一日へんしもはなれ奉るへしとは思はず。され(8オ)は、み

つからをすてさせ給ひて、いつくへとてかゆき給ふへき。なきけなき御心や」とて、かきくときなきければ、ひめ君も涙にしほれ給ひけり。

しのふ、「かくて、こゝにもましましはつへき身にあらす。跡よりおつてのまいる事もこそ侍るに、いそかせ給へ」と申ければ、ひめ君、かなしき中に、いとゞさへ物うき目にもやあふらめと、あぢき(8ウ)なくおほしければ、しのふとうちつれ、なくくいそかせ給ふほとに、のぐちと申所につかせ給へは、夜はほのくゝとあけにけり。

むかひをはるかにみ給へは、さと人のあまたあつまり、ねんぶつとなふる所ありけり。ひめ君、此よし御覽して、われはかり物思ふものはありと思へは、よその里にもなけきのあはれはこそ、かゝるあはれはあるらめと、(9才)そゞろに涙をもよほし給ひつゝ、かのあたりに立よりて、里人をちかつけ、ことのしさいをくはしくたつね、とひ給ひければ、「これは、ゆふべおきなき人のしし給ひたるを、此土中につきこめ、御あとをとふらふなり」とぞ申ける。(9ウ)

〔挿絵・第二回〕(10才)

ひめ君、このよしきこしめし、むねひしくゝとつふれて、とかくの事をものたまはず。しのぶ、さしより申けるは、「さて、その御子は、いかなる人のゆかりにて候そや」とひければ、里人、このよしうち聞て、ようありけなること葉の末なれば、あはれに思ひて、「されはの事よ。このくにのきぬかさと申所に、兵衛佐としすゑと申せし(10ウ)なかされ人の候しか、所のしゆご左衛もんかねとしのむすめに、しのひつゝ、としの三とせ

をくらしければ、つゐに一人のわかをまうく。その事じねんにあらはれければ、兵衛佐は身のをき所なくして、いつくともなくおち行給ふ。さてまた、かのわか君をは、つみあるものゝゆかりなればとて、こくしよりの御はからひにて、ものゝふとも(11才)かうけ給はり、ゆふへこの所にて、やいばのさきにかけまいらせ、うちすてゝかへり侍りしを、このあたりの人々、あはれに思ひ、土中につきこめ、そとばをたてゝ、せうみやうねんぶつをもつて、とふらひ奉るなり」とぞ申ける。

ひめ君、このよしほのきゝ給ひて、「あつ」といひて、たふれふし給へは、しのふ、あまりのあさましさに、いたきをこし(11ウ)奉り、「これはいかなる御事そや。人もこそあやしめ奉るへきに」とて、やうくゝにすかし侍りけれども、ひめ君は、さらに人めをもはゞかり給はず。天にあこかれ地にふし、をめきさけひ給ふありさまを、里人みまひらせ、「いたはしの御ありさまやな。さて、いかなる御人なれば、かほとになげかせ給ふそや」とひ侍りければ、しのふ、あまりのかなしさに、「これにわたらせ(12才)給ふ人は、なき人の御めとなり。みつからとて、おさなき人の、むまれ出給ふはしめより、てなれまいらせつれとも、かほとにはおもひ奉らざるに、わかき人とて、あなかちに、かなはぬ事をしたひ給ふことのはかなさよ」とて、ともに涙をなかしければ、里人は見まいらせ、「けにあはれなる御ことかな。さりながら、いまはさのみななけき給ひそよ。と(12ウ)てもかなはぬ御事なれば、御なけきをやめ給ひて、なき人のためとおほしめさは、たゞ一へんのねんぶつをもとなへて、御あととふらひたまへかし」と、一とうに申侍りければ、

ひめきみ、ことほりとやおほしめしけむ、二人ともに、つかのほとりに立より、「さほとにくはほうすくなき人ならば、何しに世にはむまれ出給へるそや。(13才)うらめしの御ことや。さりながら、世になしものゝなからへて、うき目をみ給はんよりも、中へにつゆときえはて給ふは、まさりけれとも、みつからをすて給ふては、さこそめいとのかげのそら、をそろしくおほすらん。しはしはまたせ給へとよ。やかて御とも申さん」と、ななく／＼なきとよきの給へは、しのふ、このよしきくよりも、「こはあさましの御事やな。(13才)わか君こそ世にましまさずとも、すけ殿の御ゆくゑ、いまたしろしめしきためすは、身をなきものにし給ふ事、ゆめ／＼あるへからず。たとひ、さりとも、としおひ給へるちゝ御をのこして、さきだたせ給ふ物ならば、五ぎやくざいをは、なにとかし給ふへき。いのちたになからへは、たつねあふまほろしのつてもあるそかし。わか君をかなく(14才)おほしめさは、たゝいかにもして、御いのちをたはひ給ひて、すけとのゝ御ゆくゑを、たつねさせ給ふへし」と、ななく／＼申ければ、ひめ君は、「なにゝかゝりてか、つゆのいのちも、なからふへき心地もせず」とて、つかのほとりにふしまろひ、りうていこかれ給ひけり。(14才)

〔挿絵・第三回〕(15才)

しのふ申ようは、「さのみ御なげき候ならば、人のおもはくも候へし。はや／＼こゝを御しのひ候て、すけとのゝ御ゆくゑをたつねさせ給へかし」と、ななく／＼いさめまひらせければ、ひめ君、ことほりとやおほしめされけん、ななく／＼つかのほとりを御立あるか、「さて、いつくをさしてゆくへきそ」との給ふを、

しのふ、はからひ申やう、「ときは、今(15才)ふゆのはじめなり。北は、ゆきはやくふるくになれば、まづぼつこくを御たつね候へきか」と申ければ、さらは、都をさしてのほるへしとて、いそかせ給ひけるほとに、賀古川につき給ふ。

その夜は、そこにやとをかり給ふか、たかさかの、おのへのかねにおとろきて、夢もむすばぬあかつきの、とりのこゑ／＼きこゆれば、たひのやとりをたち(16才)給ふ。一谷、ひえとりこえをもちすきて、夜はほの／＼とあかしのうら、むこ山おろしにすゝみの松原うちなかめ、いつかさて、恋しき妻のおもかけを、みかげのもりはこれかとよ、いまは世になくなり給はゝ、むなしきすかたをもとめづか、そなたよりゆかりの風やふくはらの、ふるき都もなつかしや、ゆきひらの中納言、とふ人(16才)あらはとよみ給ひし、すまのしほやのふゆの空、あれてさひしきはいだやと、われこふるくもるにかけられこまのはやし、玉ならばつらぬきとめんはずのいけ、なににかけか玉のおの、なからふへきとはねとも、けふまてはいくたのもり、こやのゝしゆくをうちすきて、おとにきくあしやのうらを見て、とをりいそかせ給へは、ほと(17才)もなく、おとたかくうしほも波もともにひく、大もつのうらにつき給へは、のりすてたるあまふね、いそうつなみにゆられて、うきしつめるありさまを、みたまふにつけても、みつからのみ物思ふ身は、よもあらしと思へは、水のうへにさへこかるゝけしきは、あはれやと、涙にくれて立給ふ。

しのふ、ななく／＼申やう、(17才)「この所にしはし御やすみ候て、びんせんをうかゝひうちり、川じりまでもつかせ給ふ

へし」と申ければ、ひめ君、きこしめし、「あのちいさき船にのらんよりも、中く〜にいつくまで、かちにてこそあゆみゆかめ」とそのたまひける。(18オ)

〔挿絵・第四回〕(18ウ)

しのふ、なくく申やう、「いやく、ひめ君は、いまたこれより上。かいろのことをは、しろしめし候まし。ともかくも、みつからに御まかせ候へ」とて、うらのとまやにやとをとり、なにはのうらまで、びんせんこうでうちのみつのはまにありけり。名にしおふ、にほひもよにもあまねき、なにはのむめのふゆこもり、(19オ)いまははるべにさくやこの花の、枝にはゆきもたははにて、しろくさける春かとそあやしまる。

それよりも、ひかしにをはるかにながむれば、たうばの、くもにそびえておかまれ給へるあり。ひめ君、「あれはいかに」と、とひ給へは、めのと、このよしうけ給はり、「あれこそ、上ぐう太子の御こんりう、仏法(19ウ)さいしよのてんわう寺と申からんにて侍る」と、申まいらせければ、ひめ君、「さらは、かゝるつるでなくては、またおかみ奉らんこともありかたければ、末世のちぐうにも、さんけいし奉らはや」と、のたまひければ、しのぶ、「さらは、いそかせ給ひ候へ」とて、あしにまかせてゆくほとに、いまみやのしゆくをうちすきて、ゆくもと(20オ)まるもあふさかの、しみづにうつるかけみれば、やつれはてたるすかたかな、それよりも、天王寺にまうで、七ふしきのありさままで、ことく〜おおかみめぐり給ふ。中にも、かめ井の水のきよきなかれ、ぢよくせのいまも、たえずにこらす、太子の御ほんぢをあらはせる、こんだうののきにさゝれたる、ふた

また行こうはふる(20ウ)とも、色はかはるまし。さいもんにのそみ給ひて、にしをはるかにみ給へは、夕日うみにかゝやきて、しやうじゆらいかうのみきはにことならず。むかし、しやかによらい、てんほうりんの所とも、この寺と申へし。

それよりも、あべ野をへて、すみよしにまうて給ふ。この明神と申は、あふきか原よりあらはれ出給ふ三神のすいしやく、ち(21オ)くぜんのなかのこほり、ながとのくにのとよら、つのかくにてはつものうら、三こく一たいの御神、いこくをたいぢし給ひしかは、しやだんのかまへもことさらに、にしをまもらせ給ふとかや。

むかし、このうらに、よしさだといへるたみありしか、さる事ありて都にのほり、久しく古郷にかへる事もなかりしかは、つまの女ばう(21ウ)まかれ、つるにはかなくなりけり。よしさた、このよしきゝつけて、いそきて古郷にかへるほとに、道に一つのかはづありて、よしさたかさきへはひありくを、なに心もなく思ひしに、いさこにかはづのはふたるあとをみれば、一首のうたなり。

すみよしのはまのみるめしかはらねはかりそめ人に(22オ)
またとはれける

とかきあらはし、かはつは、いつともなくうせにける。さてこそ、わかれしつまのまほろしも思へり。水にすめるかはづまで、歌をよめるためしには、これをせうこに申なり。

それよりも、さかいのはまにたとりゆき、めい所こきうせきうちなかめ、その夜はそこにそあかされける。夜もほのく〜と(22ウ)あけければ、ならのかたへおもむき、めい所く〜をうちな

かめ、恋しき人のゆくゑをも、たつねはやとおほしめして、ひんかしの山のふもとにつき給ふ。「これよりならのみやこへは、いかほとか侍る」と、ある所にてとひ給へは、「くらぎたうげとて、三里のなんじよの候へは、けふのうちに、とをり給ふことは、思ひもよらぬ事也」とそ、申ける。(23才)

〔挿絵・第五図・欠〕(23ウ)

姫君はきこしめし、「このほとのとたひのつかれに、三里ある山みちを、いかにとして、けふのうちにこゆへきとも思はねは、けふはこの所にとまり、あけなはとくしゆく所を出て、山中をこえはや」とのたまへは、「しかるへし」とて、その夜はそこにやとをかり給ふ。せきちのとりも、こゑくにつけわたり、夢もむすはず、夜も(24才)あけしかとも、名さへくらかりたうげなれば、おつる涙にかきくれて、道のくさ葉の色みえず、山中三里をうちすくれば、おとにきこえしかすかなる、みかさの山も見えわたる。それをしるへに、たとろくとあゆみ行給へは、ろくやをんをうつせる、かすか野につき給。

此野辺をあづま野とも申、または、とぶひのともいへり。(24ウ)あつまのと申事は、むかし、春日の四所明神、ひたちのくにかしまより、ならの都へうつり給へる時、むさしの国の住人、御とも申て上りけるか、つゐにはかなくなりけるを、すなはち、かすか野にとりおこなひ、土中につきこめしに、そのつかより、紫一もおひ出たり。これなんゆかりの草とて、あとの代までも、かものゝしそん、し(25才)たひかなしみけるとなり。

むらさきの一もとゆへにかすかの、草はみながらあはれと
そ思ふ

とよめるは、此心なるへし。

また、とぶひ野と申ことは、しがの都に、うぢたけといへるもの、みめよきむすめを一人もちけり。又、ならの京に、色このみのおのこあり。この女はうをこひかなしみければ、たがひに思ひはかよはしけれとも、二人のおや、(25ウ)ゆるさゝりければ、つゐにあひあふことかなはずして、月日ををくりけるか、その思ひのつもりにや、おつとは、正月の二日に、はかなくなりにけり。女もまた、おなし日、ならの都にて、むなく成しを、此のべにてけふりとなす。女のけふりは雲となり、しかのかたへなひき、おつとのけふりも雲とへんし、此のへに来て、そひえたり。(26才)さてこそ、此野へを、とぶひのとは申なり。歌に、

ひばりあがるとぶひの原にわれひとり野もせにさけるつみ
れをそつむ

とよみしは、これなり。むかしかたりのきうせきなれとも、みるにあはれそまさりける。

去程に、古郷を出し事、きのふといひ、けふとくらしして、あすか川七瀬のよどにたひねして、衣うつ音は枕に、すかはらや、ふしみの里に付給ふ。(26ウ)

〔挿絵・第六図〕(27才)

こゝにして、しのふかゆかりの人のすみ所をたつね、しはらくたひのつかれをやすめ給へり。さて、都には、中宮御さんのけおはしますとて、こゝのへのきせん、さはぎのゝじる事ありけり。さきより御なうのけおはしますうへに、御物のけさへうちそひて、御さんたいらかあるべうも見え給はねは、みかと

の御なけきは(27ウ)申すにおよはず、ちゝの左大しん、物も心にいらすして、いかゝはせんと、あきれ給ふ。

神々寺々へ、御ぐはんしよをまいらせ給ふ事、御つかひききもきらす、いし、をんみやうじの、まいりつとひたるありさまは、市人よりもおひたゝし。なんとほくれいよりも、きそうかうそうをしやうし、大ほうひほうのこる所なく、おこなはれしかとも、(28オ)きさきは、御くるしみの、やすまらせ給ふとも見えす、さが野のはらのをみなへし、つゆおもけなる御ありさま、みるにあはれそまさりける。

左大臣、だいにまいりて、そうもん申されけるようは、「きさきの御さん、へいあんの御ためとて、大法ひほうのこる所なく、おこなはせ侍れとも、かつてそのしるしも見え給はず。され(28ウ)は、たにんのなけきをやめ給はゝ、御みつからの、よろこひともなり侍るへきと、そんし候。かの、させるつみもなくして、なかされたる人々を、大しやおこなはれは、はかりなき御きたうとなり、わうじ御たんじやううたかひあらし」と、申されければ、みかど、けにもとおほしめし、る人御しやめんあるへきよしの、御りんしをあそはし、(29オ)左大臣にたひければ、左大臣、おほきによるこひ、ちよくしをえらみて、御りんしをあたへらる。

ちよくし、すてにかどいでして、はうくへむかひける日、御さん平安に、わうじ御たんじやうあるそ、ふしきなる。みかとのえいかんあさからす、左大臣の御心のうち、おもひやるへし。

去程に、月日みちければ、くにくより、なかされ人(29ウ)

とも、ことく都にかへりのほり、ほんくはんにげんぢうし、ふしのよろこひ、ふうふのむつひ、あさからさりし所に、はりまのくにゝなかされたる、たんごの右兵衛佐としすゑの朝臣は、いまたそのさたなかりしかは、ちゝ中なこんとしまさ卿、おほつかなく思ひて、左大臣のもとにまいりて、なげき給ひければ、左大臣あはれ(30オ)とやおほしめしけん、かさねてそうもんをへて、かのとしすゑをあつかひし、ひらのゝ左ゑもんかねとしかもとへ、御たつねありければ、かねとしは、「わか身のうへにわさはひきたれり」と、大きにおとろきさはきつゝ、はうくをてわけして、あひたづぬる所に、とりわけわか身は、やまとかはちをたつねんとて、みなみのくに(30ウ)におもむきけるか、かすか山、ならのふるき京につきて、かなたこなたをたつねめくる折ふし、兵衛佐としすゑは、くまのゝしんぐうにおはしましけるか、さゑもんのおとゝに、四郎かねみつと申もの、はしめよりなきふかきものにて、すけ殿のなんぎの時も、ひそかにおとしまいらせし事なれば、御ゆくゑをよくしりたり。

(31オ)

是によりて、まづしんぐうにこえて、すけ殿にたいめし、このよしを申きかせ奉り、やかて御とも申て、のほるほに、ならの都にて、左衛もんかねとしにゆきあひ給へり。たかひに是をよろこひ、日比の事ともは、わすれ給へり。

それより、あしにまかせてのほり給ふほとに、すかはらや、ふしみの里に付給へは、たそかれ(31ウ)時にもなりにけれ。こよひはこゝにくさまくら、かりねの夢をむすひ給ふ所に、すけ殿の御まくら、上人ひめ君立よらせ給ひて、のたまふやう、

「みつから、あまりに御ことのゆかしきに、跡をしたひ、此しゆくまてうかれ参りて候」と、のたまふとみえて、やかて御ゆめはさめにけり。

夜もあければ、すけとのは、左衛もん殿にのたまふよう、(32才)「こよひ、ふしきのゆめをみて候へは、この里に、もしたひ人がある。たつねてみ給へ」とありければ、左衛もん、「うけ給はる」と申て、しやていの四郎かねみつを、いへく、にまはらせ、たつねさせられける所に、ある所に、上らふ女ほう、人をしのぶていに見えて、たゞ二人やとらせ給ふを、よくくみれば、てる日のひめ君なり。

かねみつ、あまりのうれしさ(32ウ)に、声をあげてよひ奉りければ、ひめ君もしのふも、「こはいかに」とて、あきれてこそは立給へり。かねみつ、しかく、のよし、申ければ、ひめ君は、「いかにして、ちゞ御にあひたまへるへし」とて、なき給ふより外はなし。されとも、兼光は、なきけふかきものなれば、ようく、にすかしまいらせて、ともなひてかへりければ、すけとのも、ちゞの左衛もんも、「この上よろこひ、(33才)またあるへしともおもはれず」とて、ひめ君にいたきつき、よろこひ給ふ事かきりおぼ。

それよりも、すけとのは、いそぎ都にのほり給へは、ちゞの中納言、むかへてよろこひ給ふ事、申はかりはなし。やかて、ふし二人ともなひ、左大臣殿へ参り給へは、左大臣殿、出あひ給て、このほとのだひやつれにて、さんかいのちんぶつ、(33ウ)こくとのはしをそろへて、しゆをさまく、にすゞめ給へり。

(34才)

〔挿絵・第七回〕(34ウ)

そのち、兵衛佐、はしめおはりのことゝもを、左大臣殿へ申させ給へは、やかて、みかどへそうもん申。こくし中将きよつなをば、るさいにもおこなふへしと、せんじ有けれども、すけ殿は、せんじを返し奉り、「あたをはをんにてほうずべし。けふは人のうへ、あすは我身のうへとなる世のならひなれば、人いうきめみせて(35才)なにかせん」とて、かたくじし申されければ、みかと、えいかなのめならず。としすゑをてん上にめされ、やかて三位中将になされ、はりまのこくしを給はりければ、としすゑ、あさからすよろこひて、ばんしうに下らせ給ふか、ひめちと申所に、やかたをたて、かのである日のひめをむかへて、みだい所とさだめ給ふ。

これにつけ(35ウ)ても、わか君の御ことをふかくなげき、かなしませ給ふ所に、四郎かねみつか申けるやうは、「せんこくしへわたし申たるおさあひは、いやしきものゝ子なり。かの夕しほ君は、道のほとりに捨をきしを、その夜、やかてひろひたる人の候へは、たゞいまにもその御ゆくゑはきこゆへし」と、申侍りければ、二人の人々、よろこひの色をなし、こく(36才)中をたつね給へり。

こゝに又、ひめ君の御めとの女ほうは、やしなひ君を見かきりて、世をうき物におもひ、法花寺のふもとに、しゆつけをとげてゐたりしか、道にていつぞやひろひたるみなじ子は、まさしくわか君夕しほ殿なだは、あけくれぞだてて、人となし奉りける所に、すけ殿、こくしとなり給ひ、ひめ君みだい所と、(36ウ)いつきかしつかれ給ふよしをきゝしかは、おほきによるこひ、

かのわか君をいたきて、こくしのやかたへまいりける。

こくしもひめ君も、此わか君を見給ひて、「ゆめかうつゝか、おほつかなのありさまや」とて、いたひ付てそよろこひ給ふ。

いま思ひあはすれば、めのとかわれをいさめし事、一々そのいはれあり。そのうへ、わか君を(37ウ)おほしたてまいらせしこゝろざし、たぐひすくなきしだいなれば、先よろこひのはしめとて、こかぬ千両、まききぬ千ひき、よね千ごくを給はりけり。めのと、これをてうだいし、しんるいきやうだいにあたへて、一ごゑいぐはにはほりけり。

こくし中将殿は、かねみつを御まへにめされ、「われ二つなきいのちをまたくす(37ウ)るによて、かゝるさいはひにあふことも、ひとへになんぢかをんどくなり。をんをえて、をんをしらざるは、きちくぼくせきにおなしければ、よきにけんしやうまいらすへし」とて、しまつと申所をはしめとして、千町のしよりやうを給はりけり。

ちゝ^{ひめか}のさゑもんは、こくしをうとみしものなれとも、かたきの中将きよつなをさへ、(38オ)そのとがめもなきうへは、まして、ひめかちゝの事なれば、あしくはからふへきにあらずとて、すか所のをんしやう給はりて、おひのえいぐはになこりけり。たゞ人にはなさけあれ、なさけは人のためならぬとかや。かやうのためしを思ふときは、かりそめの文、玉つきにかよはず心さしも、いもせむすふの神の御はからひな(38ウ)れば、末の世の人、おぼろげには、おもふべからず。

はじめ、しのぶか中だちは、いたづらことにきこえしかとも、しのぶか空ことなかりしかは、左ゑもんのむすめは、こくしの

みだいにそなはらんことかたし。たゞ何事も、ぜんぜの事なり。この世はかりのはうべんと、おほしめさるへからず。(39オ)